

# 「惟心觀一卷」(S212)の基礎的研究(3)(資料篇)

## 程 正

小論(1)の目次(『駒澤大學佛教學部論集』第50號に掲載済)

- 一、S212に関する先行研究
- 二、S212の主な内容構成
- 三、「惟心觀」問答體部分の檢證
  - 1、1-1aの問答
  - 2、1-1bの問答
  - 3、1-1cの問答
  - 4、1-2「何名菩薩畢竟淨智」問答
  - 5、1-3a、bの2組の問答

小論(2)の目次(『駒澤大學禪研究所年報』第41號に掲載済)

- 四、「人身配天地五行」の部分の檢證
- 五、經證部分の檢證
  - 1、3-1『心王經』(『佛爲心王菩薩說頭陀經』)からの引用
  - 2、3-2『佛性海藏經』の引用とされる内容
  - 3、3-3『文殊波若經』の引用とされる内容
  - 4、3-4『受記經』の引用とされる内容
- 六、「惟心觀」の位置づけ
- 七、小結

スタインが蒐集した敦煌遺書 S212 の冒頭に書寫されている「惟心觀一卷」(尾題、以下、「惟心觀」)については、筆者がすでに拙稿「「惟心觀一卷」(S212)の基礎的研究(1)(2)」(『駒澤大學佛教學部論集』第50號に(1)を、『駒澤大學禪研究所年報』第41號に(2)を、それぞれ掲載済)において、その主な内容

構成を確認した上、新出の偽撰「達摩論」の1種と推定した。また、「經疏略疏」の擬題を有するペリオ本敦煌遺書 P3095 には、「惟心觀」の「何名菩薩畢竟淨智」を問いとす問答の内容があることも突き止めた。しかし、紙幅の制限などによって前掲拙稿での「惟心觀」本文の紹介はできなかった。「惟心觀」の本文紹介は、すでに先學によってなされたのであるが、その内容の一部に相當する異本である P3095 の出現もあり、敦煌禪宗文獻としての「惟心觀」の重要性を鑑み、その本文を改めて紹介しよう。また、筆者は寡聞にして、P3095 の内容を紹介した先行研究を知らないことから、P3095 の本文も合わせて紹介することとしよう。

録文に際して、缺損文字を□で表し、殘存部分から文字が概ね推定可能な場合、□で表したが、疑問が殘る場合、□(?)と表記した。筆者が推定した缺損文字は、□の後ろに[ ]で囲んだ。明らかに誤寫と思われる字の後ろには( )で訂正し、遺漏があったと思われる場合、【 】で補った。また、寫本に忠實であるべき見地から、新字、舊字、異體字などについては、敢えて統一を圖らず、可能な限りそのままにした。

一方、前掲拙論で言及したように「惟心觀」の主な内容構成は下記の通りである。

- 1、問答體形式を有する内容
  - 1-1a、「一切萬法、皆是心作」を宗旨とする首缺の問答(約 22 行)
  - 1-1b、「法可解不」を問いとす問答(約 4 行)
  - 1-1c、「法可識不」を問いとす問答(約 33 行)
  - 1-2、「何名菩薩畢竟淨智」を問いとす問答(約 19 行)
  - 1-3a、「何名入道」を問いとす問答(約 2 行)
  - 1-3b、「云何大乘入道、小乘入道」を問いとす問答(約 10 行)
- 2、「人身配天地五行」を中心とする内容(約 19 行)
- 3、各種經典の引用文(經證)(約 21 行)
  - 3-1、『心王經』(約 6 行)
  - 3-2、『佛性海藏經』(約 6 行)
  - 3-3、『文殊波若經』(約 8 行)<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 全 8 行のうち、最初の 2 行は梁・曼陀羅仙譯『文殊師利所說摩訶般若波羅蜜經』(T8 所收、以下、『文殊說般若經』)に基づく引用であるが、3～8 行目の内容は『文殊說般若經』に存しない偈頌である。

## 3-4、『受記經』(約2行)

## 4、「惟心觀 一卷」という尾題

便宜上、本文には該当する箇所に適宜「1-1a」、「1-1b」などの符號を挿入しておいた。また句讀點はすべて筆者によるものである。

## 一、S00212-1「惟心觀一卷」の本文校訂

首缺

1-1a 能染汙耳根、耳亦不能染<sup>□</sup>… □ /  
 不能迭相染汙、心性清淨<sup>□</sup>… □ /  
 形相猶如虛空、不可染汙<sup>□</sup>… □ /  
 眼見色、假五緣、眼不獨見、□… □ /  
 成見、不得空時、亦不成見、□… □ /  
 見者。眼根无知、不言見色。亦□… □ /  
 見空、空亦不言、我能見四緣五<sup>□</sup>… □ /  
 者、百千億沙、豈有油也<sup>2</sup>。一緣不□… □ /  
 見色。衆多盲人、亦復不共成一□… □ /  
 當知緣法无心成見、此是緣見□… □ /  
 耳鼻舌身意所對處、亦復如□… □ /  
 境<sup>□</sup>界<sup>□□</sup>亂<sup>□</sup>相、心性不住<sup>□</sup>… □ /  
 色<sup>□</sup>聲<sup>□</sup>味<sup>□</sup>塵<sup>□</sup>法之中、不住<sup>□</sup>… □ [内外中] /  
 間、不住東西南北、四維上下、不住<sup>□</sup>… □ /

<sup>2</sup> 『大般涅槃經』卷25、光明遍照高貴德王菩薩品に「世尊、如攢濕木、火不可得。心亦如是、雖復攢求、貪不可得。云何貪結能繫於心。世尊、譬如押沙、油不可得。心亦如是、雖復押之、貪不可得。當知貪、心、二理各異、設復有之、何能汚心。」(T12-515c1~5)とある。また『雜寶藏經』卷9、波羅奈王聞塚間喚緣に、「凡一切法、於可求處、若以方便、可得。若不可求、雖欲強得、都不可獲。譬如壓沙責油、攢冰求酥、既不可得、徒自勞苦。」(T4-493c6~8)とある。また『中阿含經』卷45、中阿含心品浮彌經に、「猶如有人欲得油者、以笮具盛沙、以冷水漬而取壓之、必不得油、無願、願無願、非有願非無願。人欲得油、以笮具盛沙、以冷水漬而取壓之、必不得油。所以者何、以邪求油、謂壓沙也。」(T1-710c23~28)とある。『四卷楞伽』卷1に、「大慧、若復說無種有種識、三緣合生者、龜應生毛、沙應出油。汝宗則壞、違決定義。」(T16-483c4~5)とあり、卷4に「大慧、如來智慧成熟衆生、不增不減。非身法故、身法者有壞、如來法身、非是身法。如壓恒沙、油不可得。」(T16-512a4~7)とある。後に成立した『宗鏡錄』卷2に、「是以若於外別求、從他妄學者、猶如鑽冰覓火、壓沙出油。以米砂非油火之正因、欲求濟用、徒勞功力。」(T48-425b20~22)とある。

涅槃之中、此即名為无所住心。□…□/  
所住、名入智惠海。何以故、心<sub>躰</sub>□…□□□□/  
心躰自然、无形相。一切万法□…□<sub>空</sub>去處。一切/  
万法、實不可見。雖可見、正以<sub>不</sub>□[見]、<sub>假</sub>名為見。何以故、不可/  
見故。一切万法无形故、不可見相、故不可見。一切万法、皆是/  
心作、心躰无相、故不可見。假令諸仏、一切菩薩、亦不能見、名/  
為見法。憎愛得失、往來分別、皆是无明癡或相、一心/  
作故。1-1b 問曰、法可解不。/  
答曰、法不可解、名為解。法无形相、不可以形相解。法无處所、不可/  
以處所解。法无善惡、不可【以】善惡解。若能知法无名无相、无知/  
无解、名為解法聞。 1-1c 問曰、法可識不。 答曰、若如/  
如可識、即非真如。以不識故、是名真如。正以不識為識、不知為/  
知、不覺為覺、不得為得、【不解】為解。法无形相、云何何可識。若/  
法有相可見識者、即是顛倒者、即是大患。法實无相、/  
故不可識。法无實相、亦不可見。乃至諸仏及諸菩薩、亦不/  
能見。以不可見、名為正見。一切万法、无不寂滅。一切諸法、/  
如水中月、不水中住時、人亦謂水中。心亦如是。似鏡中觀/  
其面像、像實不入在鏡中住、鏡亦不來在面中住。面鏡/  
各自本處、不相往來、入在心中住。各於本處不動、无有/  
往來相<sup>3</sup>。心迷或時、謂有來去。一切諸法、非內非外、不在/  
中間、東西南北、四維上下、求不可見、亦不可得。當起愛/  
時、即是心愛。心性不動、亦无所依。復无處所、无形无/  
相、名解脫相。圓滿不動、空如如相。若覺心空、名入/  
空門、更无思相門、心性起无作門。知心无尋、本非繫/  
縛、名解脫門。心家(冢)滅、名涅槃門。心无變異、名真如門。/  
空無乏礼、名禪定門。此一心法、隨義立名、无住无本<sup>4</sup>。若能/

<sup>3</sup> 淨覺の『楞伽師資記』道信章に、「空中生六根、六根亦空寂。所對六塵境、了知是夢幻。如眼見物時、眼中無有物。如鏡照面像、了了極分明。空中現形影、鏡中無一物。當知人面不來入鏡中、鏡亦不往入人面。如此委曲、知鏡之與面、從本已來、出不出入、不來不去、即是如來之義。如此細分判、眼中與鏡中、本本常空寂、鏡照眼照同、是故將為比。」(柳田聖山『初期の禪史 I』《禪の語録》2、筑摩書房、1971→2016、225~226 頁)とある。

<sup>4</sup> 『維摩經』觀衆生品に、「答曰、無住則無本。文殊師利、從無住本、立一切法。」(T14-547c21)とある。

知心性空家(冢)、是名菩薩入智惠海。譬如水動、不見面 /  
 像<sup>5</sup>、心亦如是。攀緣不住、不知法空。若心停住少時、方始得知、 /  
 一切諸法皆悉空家。亦如濁水、由風動轉。停住少時、其水 /  
 即清。心亦如是。境風所動、紛紜不住<sup>6</sup>。若覺心空、信无外境、即 /  
 是寂靜、入涅槃界。无分別、即是空智。一切无心、名為聖道。 /  
 无心法中、妄起分別、是名煩惱。菩提者、胡語。漢言空无 /  
 相道心。无念故、是名道心。无形相故、是名道心。波若者、胡 /  
 語。漢言智惠。發菩提心者、正發空无相道心。勤脩无相、名 /  
 為脩道。非宜持齋礼仏讀誦、名為脩道。常覺善惡无 /  
 名无相、說名脩道。覺貪嗔癡、无形无相、是名菩薩。胡言涅槃 /  
 滅、漢言寂滅。亦亦名无為、亦名解脫、亦名第一義諦。胡名菩 /  
 薩、漢言无相大道心也。仏者、胡言一切覺法平等道、先 /  
 自覺空・无相・无作、亦能覺悟一切衆生。自覺【覺】他、稱 /  
 之為仏。覺知五陰本来空冢、冢然无住、本非生 /  
 滅、名之為仏。何名如来。三世如如。即眼色如、乃 /  
 至意如。六道衆【生】、同是一軀。无異无別、皆同一如。 /  
 覺如成道、故名如来。 1-2 問曰、何名菩薩畢竟 /  
 淨(淨)智。答曰、眼所見處、是名菩薩畢竟淨智。本 /  
 来无造、自軀淨(清)淨、即是菩薩畢竟淨智。若見 /  
 一切諸法是有、名凡夫智。若見一切諸法是无、名 /  
 聲聞智。不見一切諸法有无、名菩薩智。又亦(以)定譬 /  
 如有人、善解賊智、是名賊智。解善法智、名善法智。解 /  
 空法智、是空法【智】。解无相智、是无相智。解菩薩法智、是 /  
 菩薩法智。解道法智、是名道法智。随心解處、得名為 /  
 智。聲【聞】之人、斷却欲。眼不用見好美色、耳不用聽好音 /  
 聲、鼻不用【嗅】好香氣、舌不用嘗好美味、身不用貪好 /

<sup>5</sup> 鳩摩羅什譯『禪法要解』卷上に、「佛法所重、攝心爲本。不應輕躁、縱心自放。如水波動、不見面像。掉戲動心、不見好醜。」(T15-288a4-5)とあり、また、同じく卷上に、「譬如風土、能濁清水、不見面像。欲界五欲濁心、如土濁水。覺觀亂心、如風動水。(中略)以無覺觀動故、内心清淨、如水澄靜、無有風波。」(T15-288c24-29)とある。

<sup>6</sup> 前項参照。また、『四卷楞伽』卷1に、「譬如明鏡、現衆色像。大慧、猶如猛風、吹大海水。外境界風、飄蕩心海、識浪不斷。(中略)譬如巨海浪、斯由猛風起、洪波鼓冥壑、無有斷絕時。藏識海常住、境界風所動、種種諸識浪、騰躍而轉生。」(T16-484a16-b12)とある。

妙臯。聲聞之人、妄起畏心。本无塵境、何須除断<sup>7</sup>。是/  
故不得畢竟淨智。菩薩眼見女色之時、智照【不】染、本性/  
清淨。耳聞音聲、如空谷響、必(畢)竟无實。鼻嗅香時、一切香/  
鼻、躰性空寂。舌受味時、一切諸味、性是寂滅。身對欲時、/  
觀自心性、畢境(竟)本无。菩薩之人、於五欲中、无心取捨。无/  
聽而聽、无覺所覺。心无去來、如火燒草、无心燒而燒。亦/  
如明鏡、无心照而照。亦如虚空、无心受万物、无心捨万物。/  
菩薩亦如是。觀五陰空、為欲成就一切衆生、雖然常受、/  
了知衆生如幻如化。一切諸法、亦復如是。 1-3a 問曰、何名入道。/  
答曰、道无出入。就衆生根機、說有出入。 1-3b 復問、云何大乘/  
入道、小乘入道。 答曰、大乘入道者、解真如實相、不生不/  
滅。一解之後、更无退轉。始終常一、若(苦)樂无變。長生不欣、朝/  
死不滅。觀生若倚(寄)、觀死如歸。諸惚所逼、性若虚/  
空。我所之心、畢竟不起。身不傾動、猶如大地。得達此心、/  
名為菩薩摩訶薩行。熾然精進、无有懈怠。種/  
種施為、教化衆生、无疲極相、是名大乘菩薩入道。/  
小乘入道者、脩空断結<sup>8</sup>、不化衆生、是懈怠人、故名小乘聲聞/  
入道。菩薩大士、觀姪怒癡(癡)<sup>9</sup>、躰性空寂。無姪怒癡、如何不断。觀涅/  
槃躰而不可著<sup>10</sup>。縛解奢觀、寂然一相、正是大士至極遺道。/

<sup>7</sup> 『維摩經』觀衆生品に、「(前略)仁者自生分別想耳。若於佛法出家、有所分別、爲不如法。若無所分別、是則如法。觀諸菩薩華不著者、已斷一切分別想故。譬如人畏時、非人得其便。如是弟子畏生死故、色聲香味觸、得其便也。已離畏者、一切五欲無能爲也。結習未盡、華著身耳。結習盡者、華不著也。」(T14-547c29~a6)とある。

<sup>8</sup> 主に『金剛三昧經』(T9)關係の文獻にみられる表現である。

<sup>9</sup> 『維摩經』に「若須菩提、不斷姪怒癡、亦不與俱。」(T14-540b23~24)とあるのによる。

<sup>10</sup> 恐らく『注維摩經』に「若須菩提、不斷姪怒癡、亦不與俱。什曰、得其眞性則有而無。有而無、則無所斷、亦無所有。故能不斷而不俱也。肇曰、斷姪怒癡、聲聞也。姪怒癡俱、凡夫也。大士觀姪怒癡、即是涅槃、故不斷不俱。若能如是者、乃可取食也。」(T38-350a16~21)とあるのを敷衍したものであろう。

2 頭圓法天、足方法地<sup>11</sup>。天有四時、人有四支(肢)<sup>12</sup>。天有十二月、人有十二大骨。天有 / 三百六十日、人有大小骨三百六十骨。天有十二時、人身中有大腸長丈二。天 / 有廿四氣、人有小腸長二丈四。天有廿八宿、人有苦腸二丈八。天有九星、 / 人有九孔。天有北斗七星、兩星在陰山北、不現太陽。人有七孔在面、 / 兩孔在衣下。天有雷電、人有欣。天有日月、人有眼。地生草木、 / 人生毛髮。地有江津、人有血脈。地有巖石、人有骨齒。人有小 / 指、餘血髓作之。眼主東方甲乙木、口主南方丙丁火、鼻主西方 / 庚辛金、耳主北方壬癸水、舌主中央戊己土。肝為肚藏、其色 / 青、其時立春、其【日】甲乙、配東方作木。心為肚藏、其色赤、其時 / 立夏、其日丙丁、配南方作火。肺為肚藏、其色白、其時立秋、 /

<sup>11</sup> 『五行大義』卷5「論諸人・論人配五行」に、「人圓以法天、足方以象地」(中村璋八『五行大義校註』汲古書院、1984、194頁)とある。このほかに、「頭圓法天、足方象地。天有四時・五行・九星・三百六十日。人亦有四支・五藏・九竅・三百六十節。」(同書、193頁)とあることも参考にならう。佛典では、智顛の『釋禪波羅蜜次第法門』卷三之上、分別禪波羅蜜前方便第六之二には、「頭圓法天、足方法地」(T46-492b18)とあり、また同書の卷八、釋禪波羅蜜修證第七之四に、

第二、釋內世間與外國土義相關相。行者三昧智慧願智之力、諦觀身時、即知此身、具仿天地一切法俗之事。所以者何。如此身相、頭圓象天、足方法地。內有空種、即是虛空。腹溫暖法春夏、背剛強法秋冬。四季體法四時、大節十二、法十二月。小節三百六十、法三百六十日。鼻口出氣息、法山澤谿谷中之風氣。眼目法日月、眼閉開法晝夜、髮法星辰。眉爲北斗、脈爲江河、骨爲玉石、皮肉爲地土。毛法叢林、五臟在內。(中略)當知此身雖小、義與天地相關。如是說身、非但直是五陰世間、亦是國土世間。(T46-532b26~c16)

とある。詳細については、拙稿「「惟心觀一卷」(S212)の基礎的研究(1)」(『駒澤大學佛教學部論集』50、2019)を参照されたい。

<sup>12</sup> 『文子』卷3、九守篇に、「老子曰、人受天地變化而生、一月而膏、二月血脈、三月而胚、四月而胎、五月而筋、六月而骨、七月而成形、八月而動、九月而躁、十月而生。形骸已成、五藏乃形。肝主目、腎主耳、脾主舌、肺主鼻、膽主口、外爲表、中爲裏、頭負法天、足方象地。天有四時、五行、九解、三百六十日、人有四支、五藏、九竅、三百六十節。」(文中にある割注は省略)(唐・徐靈府注『通玄真經』原刻景印百部叢書集成、鐵華館叢書、臺北・藝文印書館、1968、卷3、1裏)とある。『文子』は2卷12篇からなり、唐の天寶年間(742-755)に『通玄真經』と尊稱された道教文獻である。著者、成立年代は不明であるものの、その名は早くも『漢書』藝文志・諸子略・道家の項にみえ、『隋書』經籍志、『舊唐書』經籍志、『新唐書』藝文志にも言及されている。特に、現存のものとはほぼ同内容の殘簡が1973年發掘の河北省定縣40號漢墓出土の竹簡中から發見され、その偽書説を覆すほどの史料として注目を集めている。(何直剛・劉世樞「定縣40號漢墓出土竹簡簡介」『文物』1981-8、12頁。)

其日庚辛、配西方作金。賢(腎)為肚藏、其色黑、其時立冬、其日 /  
壬癸、配北方作水冰凍。 /

眼是肝家侯、口是心家侯、鼻是肺家侯、舌是脾家侯。 /

人身配天地五行<sup>13</sup>。頭是金髮菩薩、耳是聲明菩薩、舌是靈相菩薩、 /  
食是藥王菩薩、口是出入氣虛空菩薩、衣是瓔珞菩薩、 /

手是力士菩薩、兩脚是雙林菩薩、骨是金幢菩薩、血脉是流光菩薩、 /  
身是地藏菩薩、心是大自在王、阿彌陀佛、處中 /

作佛。身裏有八万四千戶虫、即是一境界。衆生亦名八万四千波 /

羅蜜。3-1『心王經』<sup>14</sup>云、轉外境入真如。照明三昧从眼三昧安詳 /

而起、音聲从耳根三昧安詳而出、香積如來从鼻根三昧 /

安詳而出、智明如來从身根三昧安詳而出、法喜如來从 /

從[舌根]三昧安詳而出、法明如來从心根三昧安【詳】而出。大自在 /

王心性清淨 故、各各自有微塵菩薩以為眷属、教化 /

衆生、行頭陀法。 /

3-2『仏性海藏經』<sup>15</sup>云、仏告除疑大士<sup>16</sup>、善男子、眼為微明、耳為神 /

【祐】、鼻為坐注(主)、舌為傳(傳?)裘、身為裘車、意為雄、智為雌。 /

微明為性惟衛仏、神祐為式【仏】、哭(坐)主為隨葉仏、傳(傳?)裘苻為拘樓  
□仏、 /

<sup>13</sup> 『鍼灸甲乙經』卷1、五藏變脈第二に、「黄帝問曰、五藏五脈、願聞其數。岐伯對曰、人有五藏、藏有五變、變有五脈、故五五二十五脈、以應五時。肝為牡藏、其色青、其時春、其日甲乙、其音角、其味酸。(中略)心為牡藏、其色赤、其時夏、其日丙丁、其音徵、其味苦。(中略)脾為牡藏、其色黃、其時長夏、其日戊己、其音宮、其味甘。肺為牝藏、其色白、其時秋、其日庚辛、其音商、其味辛。(中略)腎為牝藏、其色黑、其時冬、其日壬癸、其音羽、其味鹹。是謂五變。」(晉・皇甫謐撰、宋・林億等校正『鍼灸甲乙經』、原刻景印叢書集成續編、槐廬叢書、臺北・藝文印書館、1971、卷1、3裏～4表)とある。また同じく卷1、五藏六腑官第四に、「鼻者肺之官、目者肝之官、口唇者脾之官、舌者心之官、耳者腎之官。凡五官者、以候五藏。」(同書、卷1、6表)とある。

<sup>14</sup> 『佛為心王菩薩說頭陀經』に、「是時大地六種震動。當動之時、妙色身佛、從眼根三昧安詳而出。妙音聲佛、從耳根三昧安詳而出。香積如來、從鼻根三昧安詳而出。智明如來、從身根三昧安詳而出。法喜如來、從舌根三昧安詳而出。法明如來、從心根三昧安詳而出。何以故。六自在王、性清淨故、各各自有微塵菩薩以為眷属。教化衆生、行頭陀法。」(方廣錫主編『藏外佛教文獻』1、北京・宗教文化出版社、1995、315～316頁)とある。

<sup>15</sup> 恐らく敦煌遺書から発見された『佛性海藏智慧解脱破心相經』(T85所收)であると思われるが、大正藏本には該当する箇所が見当たらない。

<sup>16</sup> 『佛性海藏智慧解脱破心相經』において釋尊と問答を交わす相手として登場する人物である。



袞車為那含牟尼仏、雄為迦葉仏、雌為釋迦牟尼仏<sup>17</sup>是。/  
 心因四大、運轉六根、成身之性。地水火風、皆入如實之際。衆生妄/  
 見有實、不能離於生老病死苦。 3-3『文殊波若經』<sup>18</sup>云、捨一切攀/  
 縁相、唯念一仏、行一智般若波羅蜜。念々相續、即是念仏三昧。/  
 五陰山中有一塔、蔓陁【羅】華為周匝(匝)、芬陁利華遶四邊、龍華三/  
 會一時合。 五陰山中有一池、四傍九瑠璃。種種好華間雜生、將/  
 知仏法難思議。染玉何曾著、研珠轉益丹、本來無分別、火宅/  
 不相忤。 五陰藜林下、多饒無量 壽、所以求不得、都【因】心外走。/  
 五陰藜林下、多饒智慧力、斬却无明根、得見真弥勒。 五陰藜林下、多/  
 饒(饒)穢垢塞、願入香谷池、[洗]却煩惱賊。/  
 3-4『受記經』云、慧明法水以洗心、除却身中煩惱垢。脩清神、淨凡口、/  
 身无尋、智无弊(蔽)。 4 惟心觀一卷/

## 二、P3095の本文紹介

前缺

性睡□ … □ /

則心睡但无別睡則是睡覺无別見睡為覺□ … □ /

由同死人爰如草木睡心覺故睡真覺心□ … □ /

木若本覺无睡心者爰復无由得起□ … □ /

起夢中之見覺與不覺□[爰]復如是□ … □ /

之起妄覺性之中若无不覺爰復无由得起於妄是□ … □ /

今方始得起六七忘(妄)心是則不覺之中有覺性(?) □ □ … □ /

<sup>17</sup> 過去七佛のこと。七佛については、種々の經典において屢しば言及されている。たとえば、失譯『七佛父母姓字經』(T1 所收)は、維衛佛、式佛、隨葉佛、拘樓秦佛、拘那含牟尼佛、迦葉佛、釋迦牟尼佛の順に七佛の名を擧げており、また『法苑珠林』卷8、種族部第四には、「第一維衛佛、第二式葉佛、第三隨葉佛、此三佛同是刹利王種。第四拘樓秦佛、第五拘那含牟尼佛、第六迦葉佛、此三佛同是婆羅門種。第七今我作釋迦念佛、是刹利王種。」(T53-334a17~20)とある。

<sup>18</sup> 梁の曼陀羅仙譯『文殊師利所說摩訶般若波羅蜜經』卷下に、「文殊師利言、世尊、云何名一行三昧。佛言、法界一相、繫縁法界、是名一行三昧。若善男子、善女人、欲入一行三昧、當先聞般若波羅蜜、如説修學、然後能入一行三昧。如法界縁、不退不壞、不思議、無礙無相。善男子、善女人、欲入一行三昧、應處空閑、捨諸亂意、不取相貌、繫心一佛、專稱名字。隨佛方所、端身正向、能於一佛念念相續、即是念中、能見過去、未來、現在諸佛。」(T8-731a)とある。

覺性之中有不覺故令此妄心恆起顯倒妄心之中□□…□/  
 之力即經逢善知識等外嫁薰力令此不覺顛□□…□/  
 号之為仏雖縁諸境識道幽微□□…□/  
 融悟者哉上来相容含前文中容離於方則無□□…□/  
 道要須安心真如不二返照之理一切諸法皆以□□…□/  
 者非有想(相)非无相有无俱相欲明顯離□(?)切(?)□□/  
 无相故即起四到(倒)執有是常到執无是斷則非□□/  
 不二到執有无共□是□□□心□□…□/  
 三昧處定念名无二行之彼止斥云何无二行非□□□/  
 是菩薩行故經云若二是為不二是无為離此二□□□/  
 於菩薩義中亦无有菩薩正行第一義□□…□/  
 大乘一異安心法一切諸法皆菩薩為躰菩薩□□/  
 非異相非非一相非非一異俱相欲明密薩□□…□/  
 菩薩无相故即起四到若執一即違世謫恒沙□□…□/  
 一如之理若執非一非異即違負融不住之道若□/  
 俱即違二諦□□…□性无有鞞礙四到即識□□…□/  
 能為異離面无鏡像是名異所同念異々念同□□…□/  
 无同故經云菩提者不可以心得不可以身得寂滅是□□/  
 故相所是滅者不復更滅也八識随流教導用返□□…□/  
 乘差別是返流盡原證道用者返著五乘□□…□/  
 負融不二无不二五乘念不立返流八識念不立八識随流如(?)□□/  
 原第一義諦用負融不二无不二實識用次明守五意□□/  
 故前守六識復守五識答曰六制内守□□…□/  
 意識者所謂於一切時一切處隨身口意所有作業悉當□[一]/  
 切時行住坐臥語食等云何一切處眼見色耳聞聲鼻嗅□/  
 覺觸此上五根五塵不能造業唯意識□□是故□□…□/  
 々起即觀未有因縁无自性以有因縁无他性常照□□/  
 无業者即是解々脱々者即菩提云也何名菩提□[善]/  
 提滅諸相故次教識業若欲安心先須識業一切衆(?)□□/  
 業不解安心所以得知故經云譬如人例依地□起來□□…□/  
 行者先須識業後可安心問曰云何安々心々何處□□…□/  
 欲得識業々有多種有四子一名集二名轉三名惠業□□…□/

此通凡聖云何名集業一切衆生不了根塵以不了故□…□/  
 □□□集(?)成業種子名為集業衆名廣採集業以□…□/  
 □□□□故意識發起以識起故法塵不現是故□…□/  
因(?)□□識故於理不了故起妄分別故轉成□…□/  
 從何處生 答曰從意識生意識從何生從梨耶□…□/  
 子從何生從集業生集業從何處集在眼塵集□…□/  
 意識從何處起從轉識起轉識從何起從意識□…□/  
 復有二種名一名轉識緣於根塵二名轉業現於法□…□/  
 識復有三種一分離識緣於根二名分別識緣於□…□/  
 事識緣於根塵此明 却徵生起所由 次明□…□/  
 相生 問曰云何不能相生 答曰衆生迷故謂言□…□/  
 智者不尔所以者何迷時名妄解時名真 〃時无妄□□[明時]/  
 无闇 〃時无明解或(惑)不俱明暗不並故知如此起因□…□/  
 次明止觀義 所言觀者了如根塵內外性空因(?)□…□/  
 不分別以无分別故業種不成名之為觀以業種不成□…□/  
 耶藏空故无有種子以无種子故无有變動以不動故意/  
 識不起故法塵不顯煩惱自己名之為止 菩□[薩]□因(?)乘住/  
 約躰分別ササ就行辨 問曰云何名大乘其大乘者无行(?)有方/  
 有便安心无住處不着有不行於平等云何不行有方便安心/  
 无住處真心躰寂名為不行真寂心中具有恒沙照用性无倚/  
 着相故无住處云何不着有无雖說躰寂无有躰寂之相雖說/  
 照用无有照用之能故名不着有无云何行平等躰寂照用是(?)性不/  
 言不性即是實性故名平等約躰說訖 問曰名菩薩畢竟/  
 淨智本来无造自躰清淨即是菩薩畢竟淨智 答見 〃/  
 一切法諸法是有名凡夫智若見一切諸法是无名聲聞智不見/  
 一切諸法有无是菩薩智久矣不定譬如有人善解賊智是/  
 名賊智解善法智名善法智解空法智是空智 〃解无相/  
 智是无相解菩薩法智菩薩法智是菩薩法智解道法/  
 智名道法随心解處随脩行處得名為智聲聞之人断却/  
 五欲眼不用見好美色耳不用聽好音聲鼻不用嗅好香氣舌/  
 不用嘗好美味身不用食好妙觸聲聞之人妄起畏心本无塵/  
 境何須除断是故不得名畢竟淨智菩薩眼見女□之時智照/

不染本性清淨耳聞音聲如空谷嚮畢竟无實鼻息香時 /  
 一切香鼻躋性空寐舌受味時一切諸味性是寐滅身對欲時 /  
 觀自心性畢竟本无菩薩之人於五欲中无心取捨无聽而覺 /  
 所覺心无去来如火燒草无心燒而燒如明鏡□□□[无心照]而照如 /  
 虛空无心受一切万物无心捨万物菩薩如是觀五欲空□□成就一切 /  
 衆生雖然常愛了知衆生如化一切諸法如復如是 /  
 大乘法門 余本是性淨国人属大涅槃州清寂彼斥群(郡)寐滅 /  
 法身縣薩婆般若鄉真如里止下住无為村无作舍□□[父名]平等母 /  
 名慈悲余忽逢惡世遭值魔軍寢敵甚強遂即没陣落在 /  
 三界沉溺苦海波浪津流壽命六道随業種類以三界纏縛 /  
 曠劫弥延於今不已恒与无明為奴貪愛為婢色聲香味觸 /  
 法遞相綺絆不得自在即今憶彼耶孃本是網郡好人雖言 /  
 没陣有根大賊即綺(騎)大精進馬罽(腰)帶智利劍脚踏平等地 /  
 手把禪定弓放大智惠箭射破心中卅六種軍摧破如微 /  
 塵種子住在四大五陰村大明智惠在心裏如木有□□攢斫火 /  
 出薪焚滅報鄣衆生作仏如復然十二因緣者但□□顯 /  
 唯識心觀法 問曰何名一切法根本 答曰心是一□□[切法]之根本 /  
 問曰云何得知心是一切法之根本 答曰譬如一切百草樹木皆 /  
 從地出一切万法如復如是皆從心出 問曰何者名□[為]一切万法 /  
 答曰五陰十二入十八界是一切万法五陰者色受相(想)行□[識]□…□[內] /  
 有六根眼耳鼻舌身意是外有六塵色聲香味觸□□[觸法]是根 /  
 塵相入是十二入十八界者內有六根外有六塵中有六識三十六 /  
 八用事不同名之為界 問曰何名境界 答曰眼心所見青黃 /  
 赤白樹木舍之屋天地万物日月星宿此等即是眼□□[心境]界耳心所 /  
 聞善惡音聲鐘鼓風雨歌詠讚歎啼哭罵言此□[等]即是耳 /  
 心境界鼻所嗅香旃檀沉水腥膠臭處此等鼻心境界舌所 /  
 受味甜苦辛酢鹹(鹹)淡等味可口所受此等即舌心境界身所 /  
 覺觸冷暖澁滑痛痒輕重如是以觸此等□□□□[即是身心]境界 /  
 意所緣處随所嫌愛念仏法僧處善惡罪□福天堂□…□所(?)緣 /  
 諸境唯知是心即能自覺對境心住以心住故境无取捨是名為智 /  
 對一切无形无相念无處所皆悉虛妄空无有實譬如有人五指摸 /  
 空不見處所虛空之處及五指頭不見變異意法如復如是眼見一 /

切万法之時[眼]根之中无變異相耳聽聲時耳根之[中]□[无]變異相鼻/  
嗅香時无變異相乃至舌味身觸意法之中无變異相猶如虚空/  
有何真實是名真如本无變異如鳥飛空中不見脚迹處所六/  
根如復如是不見自心行迹處所心之所作嗔喜驕憍罪福善惡/  
寧有處所一切万法但有名字而无形相□…□用空不/  
後缺

完

本稿は、「海外の研究者との連携による中国・日本における禪思想の形成と受容に関する研究」(令和元年度、国内共同研究〈代表者:東洋大學・伊吹敦〉)の研究成果の一部である。

キーワード: 惟心觀一卷 達摩論 敦煌禪宗文獻 S212 P3095